

【正論】「歴史認識」以前の根本的な問題 大阪大学名誉教授・猪木武徳

2024年10月11日（金）産経新聞 寄稿記事

大学生の知的関心と知識の種類はここ半世紀の間で大きく変わった。学生と接する機会の多い友人たちが、その驚きを示すエピソードを教えてくれた。

《歴史や文学に関心薄い学生》

大学で化学の教育・研究に携わってきた友人は、退職後、公益法人の学生寮の寮長を務めている。70年ほど前に京都の篤志家が設立した食事つきの男子学生寮だ。

寮長は夕食後に学生たちと雑談する機会がある。会話を楽しんでいると、学生が日本や世界の歴史をほとんど知らないのに驚くことが多いという。

高等学校では、もちろん日本史や世界史の授業がある。しかし大学受験の際、これら歴史科目を選択しない限り、歴史への関心を深める機会はほとんどない。高校生の勉学の内実が大学受験の科目選択によって大きく左右されているのだ。

もうひとりの友人の話にも驚く。夏休みに入る前に、演習の学生と後期に予定されているゼミ対抗の研究発表のテーマを検討したときのこと。「イスラエルのガザ侵攻」などの話もでて来るとかと思っていたら、「ガザ」がなにかを全く知らない学生が半数近くいたという。

学生から出されたテーマの候補は、「犬の殺処分問題」「カメムシ大発生」「怖い絵の見方」などであった。誰もが知る有名大学での話だ。

イスラエルとパレスチナの関係の歴史は複雑を極める。その「事実」の確定と評価は、専門家の間でも一致を見ているわけではない。

学生たちが利用しているメディアには、国際政治のニュースが流れることはないのだろう。

こうしたエピソードを述べたのは、学生の知識欲の不足を嘆くためではない。実際、若者は意外なことを実に詳しく知っている。問題は彼らの知識が偏り過ぎていることだ。技術や「即答智慧」の習得に熱心で、歴史や文学への関心は極めて薄い。

《具体的知識と探求力》

大学受験制度は若者の人材選抜のフィルターとして機能する。希望する大学に合格するため、どの科目を選択すればよいのか、効率的な方法を考えるのは当然だとしても、その過程で歴史の勉強がおろそかになっているのは問題だ。

大学で何を専門とするにしろ、歴史・文学などを読むことは必須であろう。古人は「羊毛をあざやかな紫に染め込もうとすれば、その前に、羊毛をある種の薬剤に浸すがよい」と述べた。人文学の勉強は、この「ある種の薬剤」にあたる。

歴史教育の話になると、教科書検定がしばしば問題となるが、そうした論争以前の根本的な問題が存在するように思う。

いわゆる「歴史認識問題」を歴史解釈の問題として理解するには、歴史に関する多くの具体的知識と、人間について知りたいという探究欲は欠かせない。

歴史について多くを学んでいなければ、どの歴史叙述が「事実」に近いのか、その記述の「実証」は確かなのか、といった論争の持つ意味を理解することはできない。新しく導入された「歴史総合」という科目を必須とすることだけでは、そうした理解が進むとは考えにくい。

過去の出来事を「正」「不正」の視点から断罪すれば歴史を学んだことになるというわけではない。歴史は一回生起的であり、完全に同じ事象が起こるわけではないから、具体的知恵をそのまま歴史から直接学べるわけではない。しかし勇気や節制、正義の徳など精神の大切さを実感できよう。

《すぐ役立つものだけが学知か》

人間の心に潜む善と悪の混沌（こんとん）を知るために、古典文学を読む、あるいは良質な歴史小説を読むのも力になろう。

あるいは教科書が重要な役割を果たすのであれば、日本の「歴史認識問題」だけでなく、諸外国、例えば独仏・独ポーランドの間の歴史教科書改訂作業を知るのも重要な学びとなるう。

それにしても、日本の優れた若者が理学・工学方面に進むとき、高校時代に歴史を学ぶことで想像力や記憶力を十分育む環境がないという現状は再考されるべき根本問題だ。

すぐに役に立つもの、論理的に厳密に証明できるものだけが学知だとみなす風潮は今や世間の隅々にまで行き渡ったかのようだ。曖昧なものを知識の世界から一掃するのが学知の進歩だと考えるようになったのだ。

1945年2月15日、東京大空襲のひと月ほど前、自由主義ジャーナリストの清沢洌（きよし）は『暗黒日記』で「教育の失敗だ。理想と、教養なく、ただ『技術』だけを習得した結果だ。彼らの教養は、義士伝以上に出ぬ」と書き記した。

技術は国力の重要な一部ではある。しかし、その技術を、何に、どう使うのかが問題となる。

その際、ヒントとなりうるのは、歴史や文学などの人文知をも学び取った聡明（そうめい）な科学者の叡智（えいち）なのだ。（いのき たけのり）